

あそ

5

2020



須賀忠男のBird Note



清頼の  
緑地保全の森に  
オオタカが  
住みつけた  
子供が生れ  
母鳥を呼ぶ声が  
遠くまでよく響く

## 五月集

佐藤 喜孝

春の月

十三夜春もをはりの雨らしき  
春の月ことさらにして飛鳥路は  
おぼろ月あたり金泥ぼかしかな  
誤飲した犬のせつなし春の宵

光年の先をうれひて蓬餅

膝ついててのひらついて春の土

香のはしる濱防風を噛むかな女

防風を噛みて湯ぼてり酒ぼてり  
かな女

うつすらと地をながれゆく春の雨

朧月海の重さおもひをり

クリオネは立泳ぎして紅差して

朝涼の寺に連れ出す夜泣きの子

晝寝から手足ひきずりだす時間



東京

篠田 純子

濃厚接触

ヒトからヒトへ伝言ゲーム春埃  
柳の芽其れぞれ光凭れゐて  
濃厚接触の有無を問はるる猫の妻  
紅顔の白晳と成り卒業す  
我渾名オリーブオイル蒔草

東京

篠田 大佳

「新社員」抄(一)

春きざす文庫本読むホームレス  
ポケットよりイヤホン伸びて新社員  
零戦は空望みさくらは咲きぬ  
革靴の紐のほどけて桜まじ  
男の子マイペースよね花曇

石川

定梶じょう

猫の産

待ってゐる盲導犬があたたかし  
戦争かめばる煮たれば目玉落ち  
休刊日新聞受は覗いてみる  
先になり春野をチワワあとになり  
土建屋の資材置場に猫の産

東京

須賀 敏子

桜東風

落椿川鵜と共に潜りけり  
歩くこと歩けることや椿咲く  
桜東風飯能行の三両目  
原発の反対デモや東風の中  
ジェット機の音のみ残し春雲へ



東京 田中 藤穂

三月十日

春寒し 椎は空洞 拵げゐて  
もやしの根とり 春愁を深めをり  
戦争や 三月十日 熱く寒し  
防風の嫩葉 茹でをり 海の音  
日暮里の 駅の混みゐる 春彼岸

三重 長崎 桂子

三月

啓蟄の土手を 彷徨はや 眩し  
ベーグルに 春野菜 添へ 店構  
気温の異変ものともせず 芽吹かな  
春雷や 地球の毒を 消し 賜もれ  
一心に 平穏 願ひ 彼岸かな

東京 森 なほ子

鳥羽

料峭や 真珠館へと 廊渡る  
幾千の 真珠の 館 春の 潮  
幾万の 貝を抱きて 春の 湾  
春の星 この 保護犬を 幸せに  
先づうがひ 手洗ひをして 春寒し

東京 赤座 典子

春筍

春の雨にレゴとぬり絵と プラレール  
パンデミックと 印籠かざす 蜃気楼  
花ミモザ 香る 国際女性デー  
春筍 茹づ 甘く 変れり 厨の 香  
春愁なんぞと 夫買うてくる花 いっぱい



埼玉 秋川 泉

春の馬

静寂や顔上げ走れ春の馬  
うごめくや笹藪で鳴く春の猫  
鶯鳴くや先ゆくひとの柳腰  
梵鐘が響き渡りて花の寺  
濡れいろの猫足早に春の雪

埼玉 大日向幸江

春の夢

マスクしてうつ向きがちの春の町  
山葵田を巡り歩きて天城越え  
花見する話しも出ずにコロナ風邪  
武者飾り時を止めたり春の夢  
青嵐マスクの口元抑へけり

東京 七郎衛門吉保

志木街道

志木街道芽吹く櫂の左見右見  
志木街道波郷手を入る春炬燵  
志木街道歩道に威張る落椿  
志木街道戴帽式の春景色  
志木街道心平さんの詠む蛙

佐藤 恭子

鰯

日の朧水のおぼろや鰯棲む  
川の中岩切り立ちし鰯棲む  
加賀町の石臼にある春の水  
うぐひすや熱まだ籠もる登り窯  
ホームレス携帯電話使ふ春



鶯の喉は空気清浄機 佐藤 喜孝

里神楽村に活気のUターン 七郎衛吉保

はこべら旨し蒔草に混じりみて 篠田 純子

雑踏のひとつとなりてマスクかな 篠田 大佳

てふてふが元気でこぼこ宙のぼる 定梶じょう

遠富士や柳瀬川畔に犬ふぐり 須賀 敏子

柳絮飛ぶ武漢の風邪は拡がれり 田中 藤穂

気を付けて嗽手洗ひ寒戻る 長崎 桂子

枝揺れて初音一声残しけり 森 なほ子

春暁の富士大きかり露天の湯 赤座 典子

靴の子も下駄の子もあり春の泥 秋川 泉

蝶々と同じ早さの散歩道 大日向幸江

こめかみに青筋見ゆる冬の蝶 佐藤 恭子

喜孝抄





風力とソーラーパネルと向日葵と

佐藤 喜孝

向日葵とあるので、作者の訪れた、昨年の夏の北海道の風景でしょうか。風力発電用の風車とソーラーパネルと一緒に、向日葵が並んでいます。青く澄んだ空に、皆一様に太陽を求めて。果てしなく広がる景色に向かい、大きく深呼吸をされたことでしょうか。(典子)

凧や子供三人手を繋ぎ

大日向幸江

小学校の下校時でしょうか、手をつないで立ち向かっている強い風。二人では力が足りなくて、三人で頑張っています。ランドセルを背負った元気な男の子が浮かびます。凧に打ち勝った子供達は、今度は賑やかに通りを駆け回りながら帰っていきます。このような日常の風景に、元気をもらっていた頃を懐かしく思い出します。(典子)

日脚伸びる新型特急秩父まで

須賀 敏子

西武鉄道の新型車両「ラビュー」は、二〇一九年三月にデビューしました。さすが二十五年ぶりの特急で、外観も格段にあか抜けています。車内の素晴らしい設備は、今はインターネットでは

見られないのが残念です。日脚伸びるそのままに、颯爽と走るラビューで、秩父へ行く日を楽しみにしています。(典子)

一卓で読む書く食す去年今年

田中 藤穂

二〇〇八年四月、「あを」の吟行で、田端の藤穂さんのお宅へ伺いました。縁側と広いお庭のある、昭和そのものというお家で、古地図なども見せていただきました。その後、卓袱台を囲んでの句会だったような記憶があります。この句に詠まれた卓袱台でしょうか。半世紀以上にわたる去年今年の重みは本当に凄いです。(典子)

小晦日爪剪ってゐて旅心

森 なほ子

年の瀬の三十日に爪を切っていた時に、突然旅をしたいという思いが浮かびました。年が明けたら行ってみたい、初めての場所や、もう一度訪れたい場所など。今はテレビの旅番組か、アルバムなどで旅心を慰めるしかないのでしょうか。忘れないうちに、行きたい所を書き留めておきたいと思いました。(典子)

ジャケットを脱いで羽織って昼休

篠田 大佳

仕事中はきちんと着ていたジャケットを、休憩時間になったので脱いでみました。でもまだ少し



ひんやりとするので、袖を通さず羽織つて、ちょっとお洒落に決めた昼休みです。昨今は、テレワークが、すっかり主流になってしまいました。ジャケットの出番、待ち遠しいですね。(典子)

#### クリオネのゐる硝子窓宇宙かな

佐藤 喜孝

流水の天使とも言われるクリオネは、北極海などの冷たい海にすみ、日本へは流水とともに、知床の海に流れ着くとある。巻貝の仲間で貝殻は退化し、貝の身の部分だけの不思議な生き物。海中では地上とは全く異なる生物が、不思議な宇宙を展開している。クラゲなどと並んで水族館のガラス窓越しに、海の魔訶不思議を見せてくれている。これも北海道旅の折の一句だろう。(吉保)

#### 初春やバラ色のほほルノアール

秋川 泉

初春を飾るに相応しい、女性像の一枚の絵を探す。日本的感性からすると、日本画家による美人画や、版画家により彫られた浮世絵、の数多の作品の中から一枚を選びそうに思う。しかし作者は洋画の世界から探し出してきた。ここにも数多な画家と、数多な作品があるなかで、ルノアールを選んだ。彼の描く女性のほとんどは、バラ色の頬をしていた。初春に似合いの一枚になる。(吉保)

#### 寒紅や義母の煙草のフィルター

篠田 純子

愛用本に「寒紅」の句は十一句掲載されている。当然ではあるがそこには、女性と紅との拘わり

を詠んだ句がほとんどだった。見方によれば、扇情や好色の文字が当てはまるような、エロチシズムを色濃く詠んでいる。義母上様のそれは、仏煙草のジタンか、米煙草のクールか。白く長いフィルターに、鮮やかな紅色の唇あとが残っている。凄いエロチシズムを見たのは深読みか。(吉保)

#### チャルメラや糠星かうも冴えかへり

定梶 じょう

今年の冬は、雪も極めて少なく、いわゆる暖冬だった。しかしその分、揺り返しのような寒さに、時折見舞われている。正しく冴えかへりである。三・四十年前まで、冴え返りの夜に欠かせない風物、屋台引きラーメン屋さんのいた記憶がある。チャルメラの音が、その存在を知らせてくれた。この句も、作者の記憶の中の景色なのだろうか。糠星がその景を一層際立たせている。(吉保)

#### 喜怒哀楽幾多越え米寿初春

長崎 桂子

三月号から喜孝さん・泉さん・純子さん・じょうさんの順で、読後作文をした。四方の句には、偶然にも何れもカタカナが含まれていた。次の桂子さんには該当句なし。逆手を取って、仮名の一番少ないのがこの一句。幾多越えて迎えた初春。米寿おめでとうございます。それから百日も過ぎずにこの変わりよう。もう暫く幾多乗り越えることになるかも。お達者でいてください。(吉保)

#### 真似事の茶の湯なれども淑気たつ

七郎衛門吉保

本格的でなくとも茶筌の音を聞けば背筋がピンとせざるを得ない。自ずと淑気も立つといふもの。謙遜して真似事とおっしゃられてゐるがさうでもないかも知れません。(喜孝)

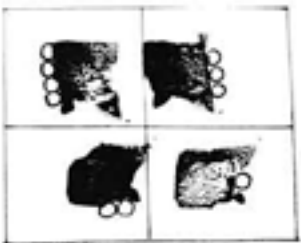
若 緑 藤 井 七 段 運 動 靴

赤 座 典 子

常盤の松も春も遅くなったこ模様替えをする。将棋界の若手のホープ藤井聡太はあつといふ間に七段に。颯爽と運動靴で対局に向かふ。その若々しさを作者は若緑にたとへ賛辞を送つてゐる。(喜孝)



佐藤 喜孝



篠田 大佳

親指で記す恋ぶみ春の水  
ぴかぴかのベンチが街に春の雪  
沈黙に疲れた街に桜かな

◎スマホでの文字入力の変速、若い人の傍で見ると驚異的である。わたしは人差指派だがこれがまた遅い。打ち間違えが甚だしい。慣れた人は片手で保持しながら余った親指で操作する。そんな味気ないやうなラブレターだが作者は「恋ぶみ」と優しく書き「春の水」と続けた。

◎「ぴかぴかのベンチが、街に春の雪」とか「ぴかぴかのベンチが街に、春の雪」とか読める。同じやうだが少し違ふ。迷つて前者の読みにした。「ぴかぴか」は、ピカピカの一年生とCMで耳に

お馴染み。春の雪が降り見慣れたベンチも目新しく見えた。

◎コロナウイルスと合せて読んだ。付度読み。付度したい力がこの句にあった。桜のことなく淋しげである。

須賀 敏子

画眉鳥の何を語るや花の中  
白鷺の降り立つ川辺花筏  
花の昼響く緑啄木鳥ドラミング

◎数年前廃刊になった『酸漿』によくこの鳥が詠まれてゐた。奥多摩に発行所があり高尾山で詠まれた俳句が多かった。画眉鳥とよく目にするが聞きなれない鳥の名で気になってゐた。二月号の「須賀忠男の Bird Note」にこの鳥の姿と特徴が書かれてゐる。家の中にゐたらさぞ耳障りなことであらう。鈴虫でさへさう思ったことがあるので放鳥されたのには同情する。しかし山野で聞けば別な趣があるのであらうか。「何を語るや花の中」である。

◎色彩の効果を狙った一句。ゆとりのある句づくりである。

◎緑の葉を青葉と云ひ、そして「緑啄木鳥」と書いてあをげらと読むさうだ。初見の人には確かにルビが必要。細かいことだが俳句をのびやかにするために類語に気を付けるとよい。「響く||ドラ

ミング」のやうな時、「響く」を例へば「通る」とか関係の薄い言葉選ひをしては。

田中 藤穂

早春の道の駅なる昔菓子  
逢ふ人の誰も親切花の寺  
大寺のはや散る桜犬連れて

◎「道の駅」といふ言葉を句会で知った。句会では言語をはじめ世情のことなどいつも様々なことを知る。それがここ数か月、叶はぬのはもどかしい。「沈黙の春」である。

道の駅はデザインも一様ではなかったのしい。「驛」はむかしむかしは早馬で公文書を届ける中継地。明治に鉄道が敷かれステーションを「驛」とした。道の駅の駅は本来の意味の戻った。掲句の道の駅に懐かしい「昔菓子」を見つけられた作者。「早春」がいい味はいを出してゐる。ほんわかとした一句。

◎「逢ふ」の「逢」は「逢瀬」と使ふ。「会ふ・合ふ」は「会合」など複数のときに。密会といふ例外はあるが。「遭ふ・遇ふ」は「遭遇」と偶然あふ雰囲気。これはわたしの感覚。この句は「逢ふ」。中七下五とつづくに相応しい。

◎前の句と並べ、昔日、藤穂さんのお寺でお花見をし、和食処で会食したことが甦った。純子さんがフラダンスを踊ってくれたのは此処だったのかな。妻がぬないと記憶が不確かだ。など掲句に関わりないことにおもひが行った。「犬連れて」と軽く流したところがこの句の持ち味。

長崎 桂子

如月や季節感なき川野山  
縁気物館びっしり吊し雛  
春雪の岳の起伏の際立ち

◎如月は春の季語だが、といつてもまだまだまだ寒さ厳しい。春の季語なのに川野山は春の季節感に味わえぬといふことか？。「川野山」もよいが「山や川」とゆるめるとよいとおもひ。

◎「縁起物」と読ませていただく。わたしは吊し雛の実物を見たことはないが、写真で見ると明るい色彩の小さなぬいぐるみがいرونな形で吊り下がっている。静岡・福岡・山形の地の風習とか。桂子さんのご覧になられたのは何処であらふか。館の中は隙間もなく吊し雛がと想像した。さぞ圧巻であったことだらう。

◎春雪を頂いたといつても岳はまだまだ冬。起伏の際立つは「山」ではなく「岳」とされたのは適切であった。

森 なほ子

春愁やジュゴンの水の薄濁り  
貝の死に真珠一粒冴返る  
ミキモトの真珠の海や東風強し

◎ジュゴンは鯨やイルカと違ひ草食。日本ではただ一頭鳥羽水族館で飼はれてゐる。メスでセレナと名づけられてゐる。絶滅危惧種のジュゴンをまのあたりにして佇む作者。春愁といひ、水の薄濁りといひジュゴンに寄せる思ひの深さを知る。

あつき日に水からくりの濁かな 大 祇  
濁りつながりでこんな句を拾った。この句の濁りも薄濁りである。水芸に驚くよりその水に目が行くとは。今は知らず江戸の水からくりの水は使い回して汚れてゐたのであらふか。

◎「貝の死に」で解釈に迷った。真珠の養殖では「貝の死に」とは云はないと思つた。自然死のやうに読めたから。でも作者は死の代償によつて得る真珠のほうばかり、人の関心が行くのに抵抗を覚えたのであらう。

◎素直な作品。わたしにも作者にも素直すぎるがジュゴンの一句を得たので満足である。

八分九分万朶を辿る花の昼

黒き渦きらり跳ねたる花鱗

休館日続く図書館草青む

◎花狩である。一昨日は八分咲き。昨日は九分、そしてけふは万朶の花の下。桜を十二分に堪能された様子が知れる。

◎澄んだ流れは見る角度により黒漆のやうに見える。なぜだらう。透き通り過ぎて光が反射できないからか。「黒き渦」はこのやうな現象を捉へた。清流を読まれたと思ふ。その漆黒の水の渦から跳ねたのが「花鱗」とは。強烈な印象を読者に与へる一句。

◎わたしが利用させていただいてゐる図書館は一年に一、二度整理のため連休する。この句の休館日はコロナウイルスの対策で休館してゐるやもしれぬ。俳句を読んでゐて想像するのは楽しいが、付度するのは苦手だ。想像と付度、似てゐるやうだが違ふのだ。おもしろいところである。この句はわたしの悩みを杞憂にしてくれる。「草青む」で門扉を閉ざしてゐる大きな建造物が静かに建つ様が浮かぶ。

山盛りの防風のある直売所

防風が籠いっばいに光る午後

図書館の休館長く春の冷え

◎防風は歳時記によると海岸の砂丘に生える多年草の浜防風のこと、春に若芽を摘んで刺身のつまなどに用いると。例句に「防風を噛みて湯ぼてり酒ぼてり 長谷川かな女」。

種明かしをしないと以下の文が空々しくなる気がする。泉さんからゆうパックで防風を送っていた。元気な植物で郵送で日が経つてゐるのにセリ科ゆえか香氣も失はずしつかり齒応へがある。かな女の俳句は防風を食べたものでしかわからない楽しさが伝はってくる。句に戻る。好きな防風が「山盛り」。で喜びも山盛りである。

◎「ふるさとに防風摘みにと来し吾ぞ 高浜虚子」。虚子のこの句を読みそして泉さんの句を読む。摘草をしたやうに受け取られてしまふ。それはそれでよいが、作者が不満なら表現に配慮がある。句が完成したら絵描きさんのやうにキャンバスから数歩下がってみる時間が欲しい。自戒を込めて。◎典子さんの「休館日続く図書館草青む」との違いは季語の違いである。典子さんは「草青む」と植物の項の季語。この句は「春の冷え」と時候の項に入るのだらうが、この季語で作者の心情を述べてゐる。「余寒」「春寒」「花冷え」はあるが「春の冷え」は歳時記はなかった。

ふらここの時を選ばず賑やかに

メダカ桶 休校中の水飲み場

三月や気ままに過ごす罪悪感

◎場所柄が良いのであらう。昼夜に拘らず誰かが使つてゐる。なぜ賑やかなのかこの表現だけでは謎で終はる。いま吹き荒れてゐるコロナウイルスと関わりがあるのかも知れない。なんでもさうみえてしまふ最近である。

◎小学校で兎や鳥、この句のやうに魚を飼つてゐることもある。学校は休みでも生き物には休みがない。係りの生徒が休みでも世話をしていると聞いたことがある。この句も休校中の学校の一光景。◎働き者が気ままに過ごす時間を得た。好きなことばかりし過ぎて罪悪感めいたものが芽生えてきた。「三月や」はこのままでは忬度して読まねばならぬ。「コロナウイルス気ままに過ごす罪悪感」と良し悪しはともかくしつかり書き残すのも大事。



パパママも時間区切らる卒園式

弥生尽 雑踏避けしネットの句

比良八荒 地球気配の徒ならず

◎今回の三句、ともにコロナウイルスに関する作品であらうか。三密を避けるための幼稚園または保育園の計らいであらう。と忬度した。

◎「ネット句会」だとすんなり理解できるのだが、「ネットの句」で難解にした。

◎比良八荒は関東にゐる者にはなじみが薄い。俳誌ではよく見かけるのだが、今回立ち止まってみた。

「特に毎年三月二十六日に行われる天台宗の行事「比良八講」の前後に吹くものを比良八講・荒れじまいまたは比良八荒（ひらはっこう）」と呼び、本格的な春の訪れを告げる風とされている。」

土地の人はどのやうな風と受け止めてゐるのだろうか。土地にはそれぞれ特有の呼び名の風がある。生活に密接にかかわるからである。東北に吹く「やませ」もその一つ。これは土地の人に「この風は山瀬といふのですよ」とその場で教へていただいたので体で覚えられた。「比良八荒」はその風を知らぬものにも四文字が力強く迫ってくる。地球を覆ふといふより人間社会に覆ひかぶさるウイルス旋風である。



詠

口をつく「象さん」の歌五月の詠  
 満月に白く照され詠の知らせ  
 詠音ありコスモスの中渡りゆく  
 詠報欄ちらと横眼に聖五月  
 雛の日信濃の人の詠音あり  
 読み返す詠報フアックス洗ひ髪  
 冬董百四歳の詠に接す  
 唐突の若者の詠や明易し  
 立て込んで詠報の届く秋の昼  
 山崩るごとき詠のくる冬の雲  
 節分や句読点めく詠がひとつ  
 空半分鯖雲のあり詠報あり  
 詠報欄になつかしき人朴の花  
 百才の恩師の詠報秋の虹  
 春雲俳人の詠の相継げり  
 詠報また大輪椿紅曇る  
 剥がされさうな詠報二月の掲示板  
 あつけなき詠報ふたつや暮の春  
 詠報なき町つつがなく夏送る  
 花レモン雨にうつろひ詠音受く  
 詠は突と秋霖松の瘤濡らす  
 詠が続く曼珠沙華また曼珠沙華

早崎 泰江  
 " "  
 " "  
 後藤 志づ  
 赤座 典子  
 " "  
 " "  
 田中 藤穂  
 " "  
 " "  
 " "  
 " "  
 " "  
 木村 茂登子  
 堀内 一郎  
 " "  
 渡邊 友七  
 定梶 しよう

詠報また届くたんぼぼ絮飛べど  
 椿落つ唐突にきく師の詠報  
 行く春や五十七の詠突然に  
 金柑を焦してしまふ詠報来し  
 梔子の一輪咲いて友詠報  
 仙人掌人の詠を聞く木のベンチ  
 腑  
 露味嗜や胃の腑静かに引き締まる  
 阿波踊り過ぎたる町の腑抜月  
 夜の秋コトリと一つ腑に落ちる  
 新走り胃の腑ゆるりとかげめぐる  
 歩けあるけ五臓六腑が春になる  
 咳激し胃の腑が喉へ裏返る  
 ファックス  
 読み返す詠報フアックス洗ひ髪  
 徒にフアックスうごく梅雨湿り  
 目借時カタコトカタとフアックス機  
 ファクション  
 老の字を少し心得夏フアクション  
 ファクションを褒められてをり零れ萩  
 ファクションもアニメの時代秋晴るる  
 ファド  
 枇杷の花ちあきなおみのファドを聴く

須賀 敏子  
 " "  
 " "  
 大日向幸江  
 七郎衛門吉保  
 森 なほ子  
 篠田 純子  
 関口 ゆき  
 赤座 典子  
 佐藤 恭子  
 " "  
 齊藤 裕子  
 赤座 典子  
 竹内 弘子  
 須賀 敏子  
 松本 米子  
 " "  
 森山のりこ  
 赤座 典子

不安

この不安どこから来るか風花す  
 裸子を空にさし上げある不安  
 蛤が舌出す不安花曇  
 一瞬の不安よぎりぬ冬の蝶  
 彼方より押し寄す不安春の海  
 鳥巢立つ毅然と不安おりませて  
 街行く人何か不安げ椋鳥の群  
 新たなる核への不安原爆の日  
 常の日の不安を除く花南天  
 此処彼処便利過ぎ不安報恩構  
 花祭ミサイル飛んでくる不安  
 竹の脱ぐ皮に斑がありふと不安  
 案山子今あけつびろげの空が不安  
 春の雪愚痴に溜息不安かな  
 この不安赤潮満ちて来つつあり  
 独裁の不安と不満パリー祭  
 白々と夜の女雛の不安顔  
 不意  
 十六夜の不意の客ある立居かな  
 不意に落つ木の葉にめだか驚きぬ  
 鼻先に不意をつきは春の蠅  
 燕や饒舌不意に止みしまま

芝宮 須磨子  
 後藤 志づ  
 栢森 定男  
 早崎 泰江  
 田中 藤穂  
 長崎 桂子  
 早崎 泰江  
 芝 尚子  
 長崎 桂子  
 " "  
 田中 藤穂  
 定梶 しよう  
 定梶 しよう  
 長崎 桂子  
 定梶 しよう  
 田中 藤穂  
 大日向幸江  
 田中 藤穂  
 早崎 泰江  
 早崎 泰江  
 赤座 典子

ぶいと  
 猫ぶいと障子を開けて出て行けり  
 ファイナー  
 ファイナーレは線香花火の火玉落つ  
 風雨  
 夜の更けて風雨急なり大石忌  
 寒蕘風雨雑言物とせず  
 風化  
 寒風にたへて蟬殻風化せず  
 夕立来て洗ふ風化の石佛  
 風化地蔵吹雪のあとの目鼻かな  
 風雅  
 名は風雅秋立つ朝に生まれけり  
 ブーケ  
 ミニバラの白清清とブーケかな  
 カトレヤのブーケをどこに置ませう  
 風景  
 忘れかけた風景に冬惜しみけり  
 風穴  
 富士風穴温むことなき春の水  
 風水害  
 風水害葉付きの大根買うて来し  
 風雪

竹内 弘子  
 早崎 泰江  
 早崎 泰江  
 田中藤穂  
 長崎桂子  
 早崎 泰江  
 阿部 寒林  
 定梶 しよう  
 大日向幸江  
 須賀 敏子  
 芝 尚子  
 堀内 一郎  
 早崎 泰江  
 齊藤 裕子



山本五十六 田中藤穂

山本五十六大将の乗った飛行機が撃墜され、水交社で葬儀が行われるので学友と一緒に参りに行っ時、入口から出口まで天井も壁も床も白布に覆われていてまるで雪のトンネルの中を行くようだった。この戦争ももう駄目だなと皆あの時に心の奥で思ったと思う。後日日比谷公園で国葬が行われたが、私はあの水交社の白一色の通路を今も忘れることができない。



白 大日向幸江

マスク・米・雪・塩・砂糖。白の品々数え上げたらいくらでもある。今一番の白はマスク。私の生活の中にはマスクとは縁がなかった。先日は風花の舞う町で買った。情けなくやるせない気持。

明け易し風雪の夢去り難く  
風雪のなく無沙汰なり屋敷森

堀内 一郎  
七郎衛門吉保

ブーツ

沓脱ぎにブーツ林立針供養  
村人の長靴ブーツ初詣  
梅雨晴間竜馬の像のブーツ履く  
初時雨派手なブーツに追越され  
ヒール高きブーツの人は夜勤明け

芝 尚子  
田中 藤穂  
森山のりこ  
森山のりこ  
赤座 典子

封筒

大封筒抱へて眠る冷房車  
風花や出さずしまひの角封筒

赤座 典子  
佐藤 恭子

笛

葉桜や笛の音はるかより聞ゆ  
笛の音の色なき風にのりてくる  
子が吹ける花びらの笛ピッピッピ  
路地とほる菖蒲の笛やあにおとと  
横笛を水に浸すや風の盆  
放生会火に温めて笙の笛  
暁がたや寝冷え覚えし船の笛  
爽やかや五町併せて笛吹市  
眇して山車の横笛過ぎにけり  
蛇が来と夜の口笛をたしなめる  
秋の風影が笛吹く豆腐売

鈴木多枝子  
芝 尚子  
関口 ゆき  
田中 藤穂  
堀内 一郎  
堀内 一郎  
渡邊 友七  
竹内 弘子  
鈴木多枝子  
竹内 弘子  
渡邊 友七

篠笛の指秋風をあやつれり  
行きゆきて山師はひよんの笛を吹く  
地震のあと神楽笛よりよき音出づ  
甲州市笛吹市山笑ひけり  
影笛に秋の夜長を楽しめり  
春の宵小さく口笛吹いてみる  
犬を呼ぶ口笛らしき春の闇  
笛吹川堤のさくら咲きをらむ  
ちんどん屋吾れが笛吹く春の夢  
だしぬけに高音発す木の葉笛  
蛇が来と夜の口笛をたしなめらる  
新入生道わたりゆく呼子笛  
横笛も琴も平家や今日の月  
ひばり笛空青きまでかなしめり  
宵宮は嫺々たるや笛の音も  
植糸つめし深田背に聞く草の笛  
鶯の笛上国甲斐は春のなか  
口笛を吹く少年秋蝶過ぐ  
かりがねや神事篠笛ひよろりひよろり  
口笛が今なら吹ける春の雲  
口笛ひゆうい帰る無月の狸飯  
笛の音もちとあらまほし熊谷草  
稽古笛棚田棚田の穂肥かな

田中 藤穂  
定梶じよう  
定梶じよう  
堀内 一郎  
森山のりこ  
須賀 敏子  
早崎 泰江  
竹内 弘子  
定梶じよう  
竹内 弘子  
竹内 弘子  
竹内 弘子  
木村茂登子  
渡邊 友七  
木村茂登子  
渡邊 友七  
井上 石動  
佐藤 恭子  
定梶じよう  
定梶じよう  
井上 石動  
井上 石動  
中川 旬寿夫

笛の音の別れ醸すや神楽舞  
ゆう笛のをはり吹き切り寒波急  
縦笛や麦秋童子臉とち  
獅子舞の笛に光りて風の木々  
沈黙の街の口笛あたたかし

ウミガメの孵化守るテント秋の雨

深い

底紅の深いところへ筆頭

一葉落つこれには深いわけがかな  
落ち葉して深い眠りに付きにけり

不快指数

蝉鳴いて次第に上がる不快指数  
次々と不快指数の竝ぶ秋

深井戸

雁渡し深井戸の蓋ずれてをり

深井戸に抜け穴のあり青芒

深井戸に沈んで浮いてしゃばん玉

深入り

石鱈玉深入りしたる茨垣

深川

深川を芭蕉と歩く霞かな

深川めし芭蕉は花の中に消ゆ

黒澤 佳子

定梶 じょう

定梶 じょう

森 なほ子

篠田 大佳

篠田 純子

篠田 純子

定梶 じょう

長崎 桂子

篠田 大佳

森山のりこ

田中 藤穂

佐藤 恭子

佐藤 恭子

堀内 一郎

堀内 一郎

深川を辰巳と呼べり金魚玉

赤葱売る深川不動お縁日

深川に簾編む音のこりけり

深川の人情いまも花菜漬

深川へ行った帰りよ冷やし酒

久々の深川飯も師走かな

赤葱を売る深川のお縁日

出汁醤油アサリ生姜や深川飯

深く

大寒の闇深くして通夜灯し

薄氷を踏みて傷口深くせり

道尋ね深くお辞儀す松の内

思ひ川秋深くして流れ行く

山深くまどろみをらむ罷どち

小春日やカサブランカを土深く

玉深く葉蔭に秘めて竜の髯

春疾風胸中深く原野あり

橋ありて霜深くあり鹿わたる

ひとひらが竹林深く風花す

古びけり杵も木臼も梅雨深く

風の息深くして散る櫛紅葉

森深く残雪のあり芽吹きあり

昨日より色深くなる濃紫陽花

後藤 志づ

田中 藤穂

堀内 一郎

田中 藤穂

佐藤 恭子

田中 藤穂

大日向幸江

松本 米子

後藤 志づ

山莊 慶子

河合 笑子

竹内 弘子

早崎 泰江

田中 藤穂

須賀 敏子

佐藤 喜孝

定梶 じょう

定梶 じょう

長崎 桂子

鎌倉喜久恵

森山のりこ

## 秋田犬

## 長崎桂子

白の文字を見て浮かぶのは秋田犬のことでした。三十四、五歳の頃に親戚からお守りに困っているのをお願いと言って連れられて来たのが全身真っ白で中型のおとなしい秋田犬でした。最初から懐いてくれて楽しい日々でしたが、生育は早くすぐに大型犬になり毎日の運動はとても大変でした。しばらくして家族との悲しい別れの時が来ました。



## マスク

## 秋川 泉

街中白いマスクだらけと思いきや黒・鶯色・花柄のマスクも歩いている。新型コロナウイルス肺炎感染。大変な時代になった。マスクなしで咳の一つもすれば周囲の全ての眼が刺さる。先日電車で私の隣の席の男がマスクをつけず大嚏をした。男は知らん顔を決め込むんだ。この野郎殴りかかりたい衝動に駆られた。やはりマスクは必要だ。早々に帰宅して全身を洗い衣服は全て洗濯した。やはり白いマスクは必要だ。



あとがき

誹諧

ネットの「俳誌のサロン」に毎日一句俳諧を紹介してゐる。なぜか来訪者が五割ほど増えた。

枕元にはいつか読まうと求めてあつた本が散乱してゐる。メモ書に宗祇法師が云はれた言葉として「連哥は先づ前句を案じ伏せ給へ」とある。この言葉の前後はともかく曲解すると、俳句の作り方に似てゐる。つまり言ひたいこと、述べたいことをしつかり頭の中で整理し、それを伏せて俳句に表現する。明解にさうして句を案じてゐる訳ではないのだが、無意識のうちに似たやうな作業をしてゐるのではと思つた。もう一つメモ帳より。

淡々文集の「富天に贈る示教」の冒頭に「詩は鏝・長刀、和歌は刀、連哥は脇差、誹諧は相口也。(中略) 荆軻は始皇の膝近く寄たり。此時、鏝・長刀・わきざしならば側へよる事なるまじ。短刀を凶に巻たればこそ一念存分はなしたり。此時秦王の佩たる劔の長きよ

りたゞちに抜事あたはず。

まだまだつづくが文芸を武具に例へる意外さに驚いた。俳句を匕首とたとへられると一歩引くがどこかで一理あるかなとも思つた。

最後にいたく気に入つてゐる一句を、

見ると年ふる節分の恋

傾城のいびきかくこそあはれなれ

素丸

(喜孝)

二〇二十年五月号

発行日 五月三十一日

発行所 東京都中野区中央2・50・3

電話 090 9828 4244

ファックス 03 3371 4623

印刷・製本・レイアウト 竹僊房

カット/須賀忠男・福井美佐子・テイリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)/一年

ゆうちよ銀行(普) (店番018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)